

## 市民のための仏教講座

## 立松和平氏講演会



日時 平成二十年九月十八日(木)

午後六時三十分開演

新潟県民会館 大ホール

立松和平さん

昭和二十二年宇都宮で生まれる。

七歳で初めて海をみる、高校時代は部活は写真部部长

十九歳早稲田大学政経学部入学、学園闘争中であつた。

二十歳ヒッチハイクを始める、二十一歳韓国・台湾・沖縄へ。

二十二歳放浪癖はいよいよひどくなり、東南アジアへ。

ベトナム戦争中沖縄でナイトクラブでアルバイト。それまでの体験を通して、処女作「途方にくれて」早稲田文学新人賞受賞。

集英社に就職。

五木寛之氏らの「石の会」のメンバーに入る。二十四歳で結婚。その後流浪の生活を送り。宇都宮市職員を経て作家として立つ。

「春雷・性的黙示録・歓喜の市等」多数の作品と放浪的な旅を愛し。

時代を追うことなく独自の道を切りひらく姿勢がさらなる文学的な世界へ成熟されていく。

幼い頃聞いた、大人の会話。人間の欲望の詰まった大人の言動は、幼い身体の中に蓄積されてきた。そのことも我々に問い続けている。

荒々しい風土で地べたを這いずるように生きてきた人々の生活を、立松さんの作品を通して、皆様のそれぞれの時代に関する、感受性・想像力をもう一度掘りおこして向き合っていたきたい。(日本文学全集より)

「あとがき」

本来布教伝道紙として出発した「仏法僧」だから、もっと内容のある記事をとというご意見もあるのですが、限られた紙面のため、ご覧のような編集になりました。

読む時代から覧(みる、ひととおり目を通す)る時代になり、どこの組織、団体の広報紙、機関紙も覧やすいようにという編集になっています。必然的に写真とイラストが多くなります。

積んでおかれるよりは、さっとでもよいから覧てもらった方がよいというでしょうか。

学校給食で「いただきます。」をいわない子供がいるそうです。親は「ちゃんと給食費を払っているんだからいいんじゃない。」という時代です。確かに内容のある布教伝道が早急に必要です。

皆さんのご意見、ご感想をぜひ編集事務局へお寄せください。

小島不二

事務局メール

ishizone@n8.dion.ne.jp

## 仏心の花を咲かせよう」

昨年の一、あるお檀家さんのご主



人が亡くなられました。葬儀には、友人や会社の同僚、部下の方々が大勢、ご主人との別れを惜しんでいらつしやいました。その方々が口をそろえて言うことは、「ご主人は、仕事でも常に相手の気持ちを考えて行動し、誰にでも優しい人であった」ということでした。数年前に退職し、その後はアドバイザーのような役割を担い、会社や部下への指導、助言を行っていたそうです。その指導、助言を行っていたそうです。その利益よりも、まず相手に対して誠意を持って接すること、お客様を大切にすることが主の内容だったそうです。その優しさが、周りの人の心を引きつけ、信頼を得ていたのでしょう。

また、ご主人は大変信心深い方で、お経に伺うと、私の後ろでお経が終わるまでお参りをしていました。仏前にお供え物がないうとき、市場などに散歩に行つては果物をひとつ、自分で買ってきてお供えしていたそうです。たったひとつの果物なのですが、なんとも心のこもったお供えでありましょう。誰にでも優しい言葉で接し、相手の立場になって行動するご主人は、正に仏様の心、仏心を持った方であったと感じたのです。

お釈迦様は、仏遺経というお経の中で「誰でも仏心というつぼみを持っています。日々努力、精進することのできるつぼみを開花させることができる」とお示しになっています。さて、今年も春のお彼岸がやってきます。

彼岸に渡るためには六つの実践が必要で、布施（与える喜び）持戒（してはいけないことをしない）忍辱（感情に流されず）精進（努力を惜しまない）禅定（心穏やかに過ごす）智慧（物の道理を正しく理解する）以上の六つを実践することが大切なことなのですが、なかなかこのすべてを常に行うことは大変難しいことです。そこで、皆様にはまず、布施の実践を行って頂きたい。布施というとお坊さんに渡すお布施を想像してしまいましたが、それだけではありません。

先ほどの話のように、人に優しさを与えることも立派な布施になるのです。

人に優しい言葉をかける、人に親切にする、困っている人を助けてあげる、これらも布施となるのです。布施の実践で仏心の花を咲かせてください。

# 稚児おねり



# 花まつり



お釈迦さまのお誕生をお祝いいたしましょう

法要に引き続きお稚児さまの「おねり」  
古町通5番町～7番町(大和デパート前)  
古町会場「湊仏会」10時～13時まで(大和デパート前)

花まつり法要 稚児おねり  
平成20年4月8日(火)  
午後1時より花まつり法要 会場 瑞光寺(西堀3)



花まつり記念講演 テーマ「出逢いとご縁」  
講師 細川玲子氏 (新通保育園副園長)  
pm3時～4時 会場 イタリア軒5F春日の間  
参加費 無料

四月八日はお釈迦様のお誕生日、花祭りです。私たち一人一人は実に尊い存在であります。そして、大宇宙の中の地球という星に生まれた私たちは、豊かな自然に恵まれた日本という国で社会を作り、お互いに助け合って暮らしています。お年寄りから赤ちゃんまで、誰もが大切な社会の一員なのです。そんな尊い自分を実感し、この世にいかされていることの喜びが、お釈迦様が生まれたときに言われた言葉「天上天下 唯我独尊」なのです。仏教徒にとって花祭りは、お釈迦様の誕生をお祝いする日であるとともに、命の大切さを考える大切な日でもあります。

泥んこ遊び、砂場での砂遊び、砂浜を子供とちよつと掘ってピラミット作りが、親が夢中になってお城を作ってしまうなんて事ありませんでしたでしょうか。  
村木さんは「土から生まれて、土に帰る」大地との共感を、参加者全員で体感していただくことを大事にされ



土ねんどの人形を約一千体、地域の方たちと土コネから、竹きり、子供たちと一緒に幼児期との対話を楽しんだ。

**新通保育園子育て支援紹介**  
**大地との共感**  
「幼児期との対話」  
十月十三日新通保育園・子育て支援センター沿線で開催された「こだま・竹灯籠祭」大地の芸術祭の立役者でもある、村木薫氏の企画による、

ている。



新通保育園

「大地の芸術祭から得たもの」

「美に感動する人は、その天才が

宿っている」 (めい・牛山)

出逢いとは不思議なものである。「その時の出逢いが、人生を根底から、変えることがある、よき出逢いを」(みつを) こんな出逢いが私の望みです。



「こだま」祭りのふれ太鼓

そのためには、知らない世界へ足を踏み入れないと起こらないことである。芸術か・・・私にはよく分からない世界であるが、美に感動する人は、その天才が宿っているという言葉が妙に心に残った。

大地の芸術祭を見るために昼近くに十日町に入ったが、展示場は広いとは知っていたが、あまりの広さに、美に感動する前に疲れてしまう、ようやくビーズの森にたどり着いた。日本の故郷のような、心安らぐ山道は足が覚えているかのように伝わって心がわくわくする。

ビーズは森の入り口で野菜を売っていた、おばあちゃん達と芸術家が一本一本作り上げたもの、山一面のビーズの木で、足元を飾られこんなに多く



土人形を親子・地域の方と力をあわせて

の人に见られ、ブナの木が照れくさそうだ。美しさに酔って山を下りながら、また疑問がわいてきた、これが芸術なのか・・・  
東京女子美大の作品群で作品の見方を習った、「気付くと、より深く」を、美術館の作品を見ても、鮮明に覚えている作品は少ないが、ここでは次の作品まで車で移動、背景と作品作りに参加した人を見ながら歩く、作品を通してより深く背景が見えてくる、「気づきと、より深く」を知って、一つ一つの出逢いが、立ち止まることで、楽しみになります。